

はにい

わたしにできること

2012. 5. 28.



そうならざるを得なかった子。

「そうなんです。問題行動を起したその子も、そうならざるを得なかった子なんです。わたしにできることはなんだろう、っていつも考えます。」

そう語ったのは、今年新たに活動を始めるスクールソーシャルワーク・サポーター。4月はじめに3日間行ったスクールソーシャルワーク・サポーターの研修会でのひとコマです。

「小学校では職員室にはほとんど先生がいなくて、なかなかつかまらないんですよ。」
昨年から活動しているサポーターが悩みを語ります。小学校では教員数が限られているので、職員室にいる先生方が少なく、なかなか話を聞く機会が持てない。学級担任が一人で問題を抱え込むことがないように、何かできることはないだろうか。

「やっぱり待ってたら入ってこないですよ、情報は。だから聞かないと。」

「私は、まずは給食を一緒に食べる。」

「なるほど！」

右のシートは、研修で事例検討をしたときに、その子の行動の背景や必要な支援を見つけるために作られたメモ。学校だけでは解決が難しい問題は関係機関につなぎます。

| スクールソーシャルワーク・サポーター 情報提供シート | | | | | | | | | | | | 児童生活支援 | | | | | | |
|----------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--------|----|----|----|----|----|---|
| 学年 | 性別 | 年齢 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | 学年 | |
| 1年(男) | 4 | 編 | 11 | 編 | 12 | 編 | 13 | 編 | 14 | 編 | 15 | 編 | 16 | 編 | 17 | 編 | 18 | 編 |
| 2年(女) | 1 | 編 | 17 | 編 | 18 | 編 | 19 | 編 | 20 | 編 | 21 | 編 | 22 | 編 | 23 | 編 | 24 | 編 |
| 3年(女) | 2 | 編 | 16 | 編 | 17 | 編 | 18 | 編 | 19 | 編 | 20 | 編 | 21 | 編 | 22 | 編 | 23 | 編 |
| 4年(女) | 3 | 編 | 15 | 編 | 16 | 編 | 17 | 編 | 18 | 編 | 19 | 編 | 20 | 編 | 21 | 編 | 22 | 編 |
| 5年(女) | 5 | 編 | 14 | 編 | 15 | 編 | 16 | 編 | 17 | 編 | 18 | 編 | 19 | 編 | 20 | 編 | 21 | 編 |
| 6年(女) | 6 | 編 | 13 | 編 | 14 | 編 | 15 | 編 | 16 | 編 | 17 | 編 | 18 | 編 | 19 | 編 | 20 | 編 |

「時間がない。」「関係機関なんてムリムリ。」そんな言葉が先生方から聞かれる学校にあって、短い時間で質の高いケース会議とするために、スクールソーシャルワーク・サポーターが課題を整理することに力を注ぎます。

スクールソーシャルワークとは、問題の要因を見極め、目標を決め、いつまでに誰が何をするか、ということを確認にしてチームで支援を行うことを言います。問題の要因を考えるとときには、その子の置かれた環境に注目することが特徴です。したがって、スクールソーシャルワーカーもスクールソーシャルワーク・サポーターもその子の学校での様子や家庭環境など、先生方から話を聞いたり、行動を観察したりすることで課題を整理していきます。

「地域を知るのも必要ですね。地域から小中学校に入っていけるのが私たちの職ですよ。」

「兄弟姉妹で通う学校が違って、家庭の様子全体をつかむことが有効でした。」

● スクールソーシャルワーカーとは

教育の分野に加え、社会福祉に関する専門的な知識や技術を有する者で、問題を抱えた児童・生徒に対し、当該児童・生徒が置かれた環境への働きかけや、関係機関等とのネットワークの構築など、多様な支援方法を用いて課題解決への対応を図っていく人材です。

県教育委員会では、5つの教育事務所に6名を配置し週2回の勤務をしています。また、子ども教育支援課に1名のスーパーバイザーを配置しています。

● スクールソーシャルワーク・サポーターとは

スクールソーシャルワーカーと連携しながら、より学校や地域に近い立場から支援を行います。各市町村（政令・中核市を除く）に配置しており、各市では週4回、各町村では週2回の勤務となっています。

研修会には児童相談所や保健福祉事務所から講師をお招きし、お話を伺うことができました。

詳細ホームページ <http://www.pref.kanagawa.jp/ent/f417834/>

ある指導主事のつぶやき。

小学校で担任をしているころ、わたしは、子どもの家庭環境にはあえて目を向けず、どちらかといえば教室での「その子自身」を見ようとしていました。今になってみれば、子どもは学校だけで生きているわけではないと理解できるのですが。

スクールソーシャルワーカーやスクールソーシャルワーク・サポーターから「学校は義務教育だからすべての子どもたちの状況を把握しているはず。福祉は申請があって初めて支援が始まるので、本当に支えが必要な家庭に支援を行うためには、学校が問題を見付けることが支援のきっかけとして重要。」というお話をうかがいました。

また、「児相への通告」についても、「通告は虐待を受けている子どもを救うだけでなく、『困っている家庭』に支援が始まること。」というお話を伺い、通告の重要性を再認識しました。

スクールソーシャルワーカーやスクールソーシャルワーク・サポーターと連携し、関係機関との連携の仕方やチームでの支援など社会福祉の視点を学ぶことが大切だと思います。



「福祉の情報や視点など、先生方とは違った立場で支援ができれば。」

「先生や子ども、保護者の思いや考えを大事に確認しながら活動したい。」

研修会が終了しても、なかなか帰らないスクールソーシャルワーク・サポーターとスクールソーシャルワーカー、そして指導主事たち。

窓の外には満開の桜。

自分の思いを形にするヒントがほしくて、会場の中のあちこちでいつまでも対話が続いていました。

—— [はにいていと] ——

つながり合いこそが宇宙が成り立つ原理である。

(ジョセフ・ジャウオースキー)